『理の書』の図と用語集

理の書

天地創造

図・用語集

旬暘 著

この冊子は『理の書　天地創造』を読みながら手元で開けるよう、本に載っている図と、本に出てくる言葉の用語集をまとめたものです。

図

それぞれの図の詳しい説明は、『理の書　天地創造』の本文（図の載っている章）をご覧ください。

図

五大世界

紫微天界	(神の幽) (神の顕)	天（陽・陰） 地（陽・陰）
七重の帷		
≪岩戸　瀬織津比売神≫		
神霊界（天　界）	(幽の幽) (幽の顕)	天（天国・霊国） 地
≪岩戸　速開都比売神≫		
地上界（中有界）	(顕の幽)	天の八衢
≪顕幽分離≫		
地上界（現　世）	(顕の顕)	天（太陽・太陰） 地
≪岩戸　気吹戸主神≫		
地国界（根底国）		天（陽界・陰界） 地
≪岩戸　速佐須良比売神≫		
地極界（底根底国）		天 地

第一章より

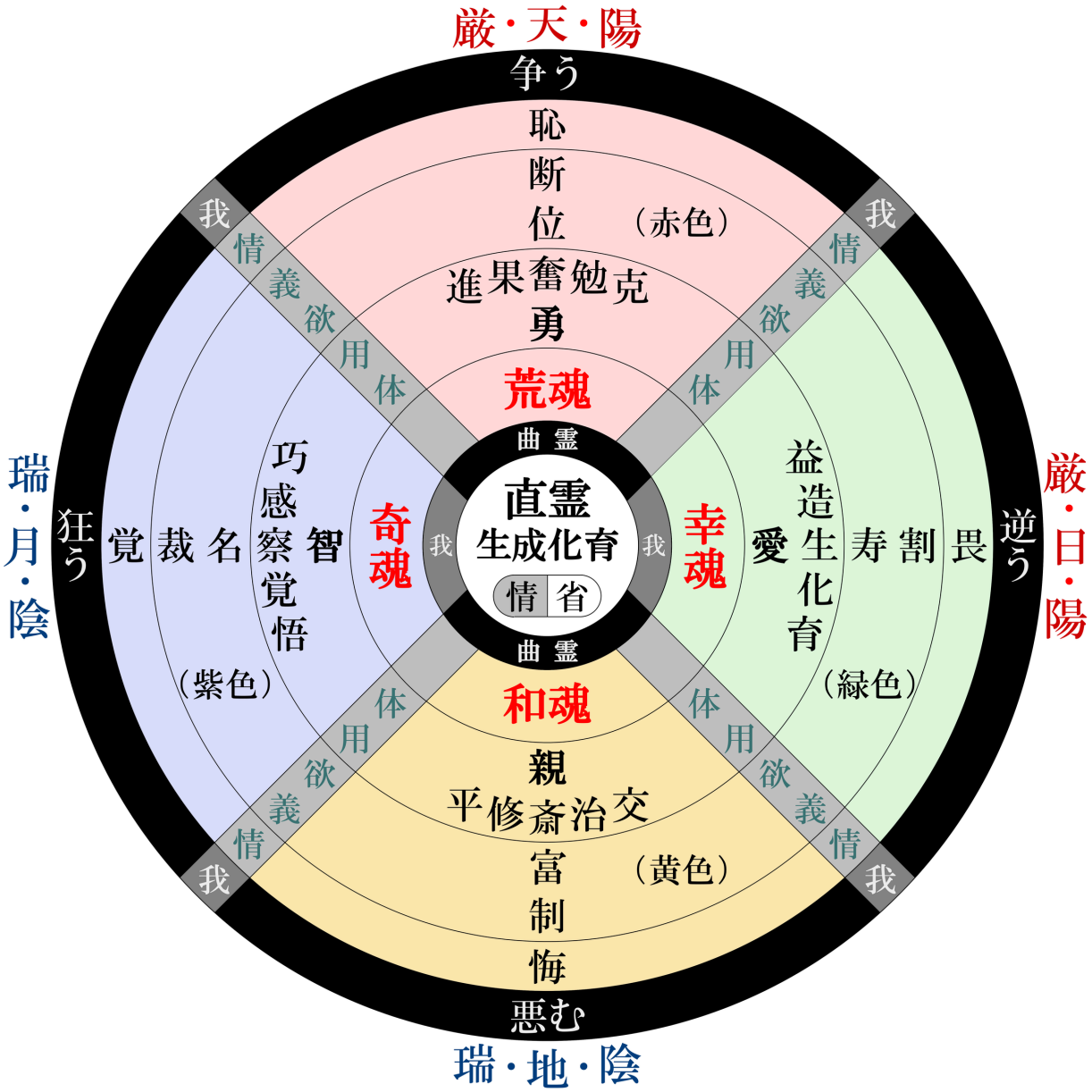
図

神の種別

	幽（天）	顕（地）
神霊界	神の幽（天）	
		神の顕（地）
天　界	幽の幽（天）	
		幽の顕（地）
地上界	顕の幽（天） （中有界）	
		顕の顕（地） （現世）

第一章・第三章より

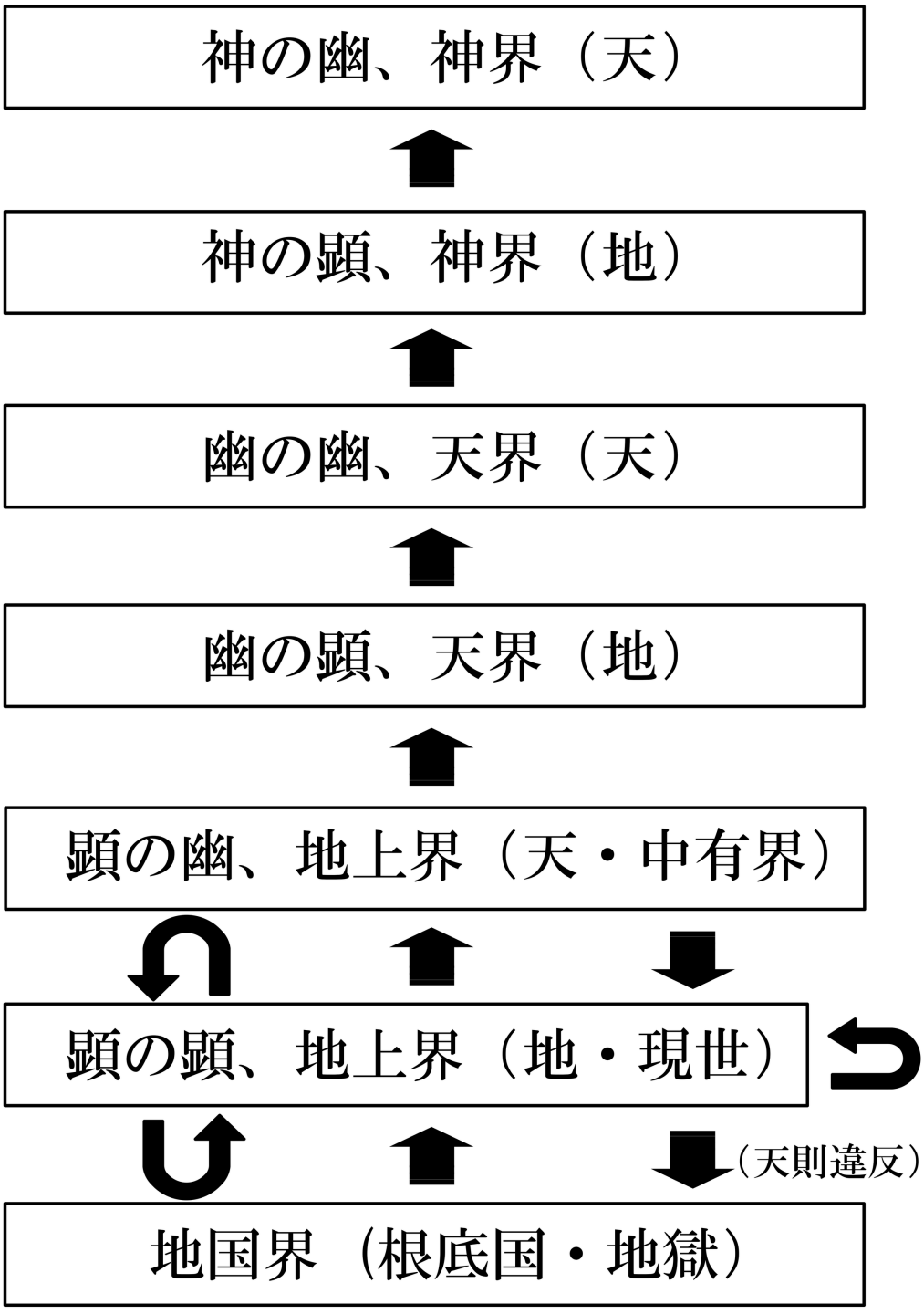
図


厳・天・陽
争う
恥
断
位
（赤色）
進果奮勉克
勇
荒魂
曲霊
直霊
生成化育
情省
曲霊
和魂
親
平修斎治交
富
制
悔
悪む
瑞・地・陰
瑞・月・陰
狂う
覚裁名智
巧感察覚悟
（紫色）
奇魂
幸魂
愛
益造生化育
（緑色）
寿割畏
逆う
厳・日・陽
我
情
義
欲
用
体

第二章より

図

流転の種別



第三章より

図

神霊界・地上界・地国界

紫微天界		
神霊界	天国（日の国） 愛と善の世界	霊国（月の国） 真と信の世界
	第一天国　上（天人）	第一霊国　上（天使）
	第二天国　中（天人）	第二霊国　中（天使）
	第三天国　下（天人）	第三霊国　下（天使）
地上界	中有界　（天之八衢）	
	現　世	太陽　太陰 大地
地国界	陽界（根の国） 愛悪の世界	陰界（底の国） 真偽（虚偽）の世界
	第一陽界　上（陽霊人）	第一陰界　上（陰霊人）
	第二陽界　中（陽霊人）	第二陰界　中（陰霊人）
	第三陽界　下（陽霊人）	第三陰界　下（陰霊人）
地　極　界（底根底の国）		

第三章より

用語集

本に出てくる言葉の読みと、本の中での意味です。五十音順に並べています。

あ行

天津琴（あまつこと）

七つの糸の琴。第一章で国祖神（こくそしん）（国之常立神（くにのとこたちのかみ））がこれを奏でると、荒野に草木が芽吹き果実が実り、それを食した者達は邪悪さが薄れ、直霊（なおひ）の働きが目を覚まして獣から霊止（ひと）へとなって行った。

天津日子根神（あまつひこねのかみ）

一霊四魂（いちれいしこん）の働きの名称である五男神（ごなんしん）の一柱で、幸魂（さちみたま）（愛）の働きの神名である（第一章・第二章）。

天照大御神（あまてらすおほみかみ）

本書では、瀬織津姫神（せおりつひめのかみ）と速秋津比売神（はやあきつひめのかみ）はこの神の御分霊（ごぶんれい）であり御同神（ごどうしん）とされ、瀬織津姫神が「天照大御神の荒魂（あらみたま）」と言われるのは祓戸神としての活動ゆえと説く。その直霊（なおひ）は大直霊（おおなおひ）と言う（第一章・第五章）。

天之神（あまのかみ）

天之峯火夫神（あまのみねひをのかみ）から天之御柱比古神（あめのみはしらひこのかみ）までの、天の世七代の七柱の神々の称。古事記（こじき）に登場する以前の神々であり、『神皇記（しんのうき）』には御神名のみが記される。ムの神（かみ）とも称する（第一章）。

天之峯火夫神（あまのみねひをのかみ）

大宇宙の万有の中心の核となる大根元の大元霊（だいげんれい）を、富士宮下文献（ふじみやしたぶんけん）『神皇記（しんのうき）』で称える御神名。大宇宙の中心の主の神であり、澄み切っているが故に他の神々には見る事も感じる事も出来ない。天の世七代の第一代である（第一章）。

天安河（あまのやすかわ）

流れの滞る事のない清浄無垢な場所。古事記（こじき）では天照大御神（あまてらすおほみかみ）と素盞嗚神（すさのをのかみ）がこれを中に

おいて誓約（うけひ）をした。第一章では、那岐（なぎ）・那美（なみ）の両神がその石を砕いて天沼矛で海をかき回し、おのころ島を造ったと説く。

天の世（あまよ）

天之神七代の世界。宇宙開闢の原初の霊的世界で、物質的な宇宙や日月星々の形象はまだ無い。この七代によって大元霊（だいげんれい）は次第（しだい）に凝り、霊が物質化される元素と成って、物質世界を創造する準備が整った（第一章）。

天之忍穂耳神（あめのおしほみみのかみ）

一霊四魂（いちれいしこん）の働きの名称である五男神（ごなんしん）の一柱で、直霊（なおひ）の働きの神名である（第一章・第二章）。

天之草男神（あめのくさをのかみ）

天の世七代の第五代の神。各世界の中心に主の神として顕現（けんげん）された御神霊の一柱で、天之神（あまのかみ）の一柱である（第一章）。

天之高木比古神（あめのたかぎひこのかみ）

天の世七代の第四代の神。各世界の中心に主の神として顕現（けんげん）された御神霊の一柱で、

天之神（あまのかみ）の一柱である（第一章）。

天之高地火神（あめのたかちほのかみ）

天の世七代の第三代の神。各世界の中心に主の神として顕現（けんげん）された御神霊の一柱で、天之神（あまのかみ）の一柱である（第一章）。

天之高原男神（あめのたかはらをのかみ）

天の世七代の第六代の神。各世界の中心に主の神として顕現（けんげん）された御神霊の一柱で、天之神（あまのかみ）の一柱である（第一章）。

天之高火男神（あめのたかひをのかみ）

天の世七代の第二代の神。各世界の中心に主の神として顕現（けんげん）された御神霊の一柱で、天之神（あまのかみ）の一柱である（第一章）。

天之常立神（あめのとこたちのかみ）

主神が顕現（けんげん）された天の神。天の土の素霊子（それいし）の御神名で、土の霊気（れいき）が幸魂（さちみたま）として活動する時の御名である。国之常立神（くにのとこたちのかみ）と対をなし、天祖の神として富士の嶺に立ち、国祖の「天七る（あまな）」に「地七る（ちな）」と応えた（第一章）。

天鳥船（あめのとりふね）

鳥之石楠船神（とりのいわくすふねのかみ）の別名。第一章では、現在の飛行機・飛行船・宇宙船などの乗り物の働きをこう呼び、ノアの大洪水以前の文明でも空飛ぶ乗り物（天鳥船）が開発されていたと説く。

天之菩卑能神（あめのほひのかみ）

一霊四魂（いちれいしこん）の働きの名称である五男神（ごなんしん）の一柱で、荒魂（あらみたま）（勇）の働きの神名である（第一章・第二章）。

天之水分神（あめのみくまりのかみ）

第四章で国之水分神（くにのみくまりのかみ）と並べて「雨の神」として挙げられる神。国祖神（こくそしん）である国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）として、世の元から休みなく活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）

全てを完備された大元霊（だいげんれい）である主神が顕現（けんげん）された神で、古事記（こじき）に最初に登場する神である。高皇産霊神（たかみむすびのかみ）・神皇産霊神（かみむすびのかみ）とともに三位一体（さんみいったい）とされ、「造化三神（ぞうかさんしん）」と称えられる（第

一章）。

天之御中世（あめのみなかよ）

天の世（あまよ）がさらに凝って現れた次の世界で、主神が天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）として顕現（けんげん）された世からの世界。この世で大元霊（だいげんれい）は、物象世界を創造する元となる「土の霊気（れいき）」を生み出せるようになった（第一章）。

天之御柱比古神（あめのみはしらひこのかみ）

天の世七代の第七代の神。各世界の中心に主の神として顕現（けんげん）された御神霊の一柱で、天之神（あまのかみ）の一柱である（第一章）。

荒魂（あらみたま）

四魂（しこん）の一つ。「荒ぶる魂」ではなく「あらわる魂」であり、言動・行動に現れる魂の働きである。物事を行おうと思う精神で、勇に当たり、色は赤色、幸魂（さちみたま）とともに陽魂（厳霊）をなす（第二章）。

活杙神（いくぐいのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、顕の「引力（いんりょく）」の神である（第一

章）。

活津日子根神（いくつひこねのかみ）

一霊四魂（いちれいしこん）の働きの名称である五男神（ごなんしん）の一柱で、和魂（にぎみたま）（親）の働きの神名である（第一章・第二章）。

伊邪那岐神（いざなぎのかみ）・那岐（なぎ）

主神の霊系を完備した御神霊で、またの御名を「日の大神」と言い、岐は気（キ）を表す。伊邪那美神（いざなみのかみ）とともに岐美（きみ）の二柱として神霊界（しんれいかい）に顕現（けんげん）された。禊をして三貴子（みはしらのうずのみこ）が誕生する話などを、本書は設神理として読み解く（第一章）。

伊邪那美神（いざなみのかみ）・那美（なみ）

主神の体系を完備した御神霊で、またの御名を「月の大神」と言い、美は身（ミ）を表す。伊邪那岐神（いざなぎのかみ）とともに岐美（きみ）の二柱として神霊界（しんれいかい）に顕現（けんげん）された。黄泉の国に行った事を、御神霊が外国で悪分子を制裁する為に活動される事と説く（第一章）。

五十鈴（いすず）

第五章の稚日女岐美神（わかひめぎみのかみ）の御歌（おうた）「泉湧き　歓喜（かんき）の衣　天に舞う　真名井（まない）の光　五十鈴の川

に」に詠まれる川の名。

出雲族

五種族の一つ。その優れた者達と真奈霊止族から大和族が、最も劣った者達と猿人族からエブス族が生まれた。第四回目の大地変で、出雲族系の殆どが滅び去った（第一章）。

市杵島比売神

体霊（副守護神）の御名で、土・竹に当たる（第一章）。第五章では、七面山に鎮まっていた七面大明神（市杵島比売神、厳島弁才天）が神界にお帰りの際、本宮の厳島を想って詠んだ御歌が紹介される。

一厘の仕組み

第一章で、「富士を開いて鳴門に収める」という「富士と鳴門の仕組み」が、「真の神が定め、神が行う」水も漏らさぬ御経綸であるとして、こう呼ばれる。第五章の御歌にも詠まれる。

一霊四魂

直霊と四魂（荒魂・幸魂・和魂・奇魂）から成る霊魂の事。直霊と四つの魂が別々

にあるのではなく、一つの御霊（みたま）に四つの働きがある。その五つの働きの名称を五男神（ごなんしん）と言う（第一章・第二章）。

厳（いつ）

瑞（みず）と対をなす語で、「五ツ」とも読ませる。五男神（ごなんしん）を厳の男神、陽魂（荒魂（あらみたま）・幸魂（さちみたま））を厳霊と言い、石長比売神（いわながひめのかみ）は厳の神とされる。第一章では天の祖神を「厳の大神」と称える。

気吹戸主神（いぶきどぬしのかみ）

祓戸四柱神（はらえどよはしらのかみ）の一柱で、地上界と地国界（ちこくかい）の間の岩戸（いわと）を守護する。現世（うつしよ）の全ての罪や穢れを根の国底の国（地国界）に放つ神であり、その間の堰におられるが故に閻魔大王（えんまだいおう）とも言われる。素盞嗚神（すさのをのかみ）の御分霊（ごぶんれい）（第一章）。

弥栄（いやさか）

大神様の生成化育（せいせいかいく）の大精神の御心が三千世界に無限に満ち溢れ、世界や人などの生物および万有の全てが、さらに弥益々（いやますます）に進歩発展し繁栄して行く事。「弥栄ましませ」と声に出して祈念する（第二章）。

岩戸（いわと）

霊的な次元の違いにより、各世界の間を隔てて塞いでいる隔たり。実際の岩の戸ではなく、岩のように強固に閉ざされているという意味で、祓戸四柱神（はらえどよはしらのかみ）が守護し、その開かれる事を岩戸開きと言う。「とびら」「いわと」とも読む（第一章）。

岩戸別神（いわとわけのかみ）

第四章で岩長姫神（いわながひめのかみ）と並べて「岩の神」として挙げられる神。国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）として世の元から活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

岩長姫神（いわながひめのかみ）**・石長比売神**（いわながひめのかみ）

第四章で岩戸別神（いわとわけのかみ）と並べて「岩の神」として挙げられる。第五章では、コハナサクヤ姫神とはこの神の事で、木ノ花咲耶姫（はなさくやひめ）とは厳（いづ）と瑞（みず）の対の神、二神で一神と説く。岩のような顔と言われたのは龍体の姿の事とする。

宇比遅根神（うひぢねのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、幽の「解力（かいりょく）」の神である（第一章）。

産土神（うぶすながみ）

日本の各地域の土地に所縁（ゆかり）ある神が神社で祀られ、その地域と人々を守護する御神霊。人は生まれる際に最も身近で強くその霊を受ける。他界後、中有界（ちゅううかい）で天界に入る準備の段階になると全ての人に会う（第四章）。

宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこぢのかみ）

火の霊気（れいき）（陽）の御名で、熱を帯びず目に見えない霊的な光の微粒子（霊光子（れいこうし））の神。火の精霊（生魂（いくむすび））であり、荒魂（あらみたま）として活動する（第一章）。

雲状霊（うんじょうれい）

大元霊（だいげんれい）の「陰陽を持つ土の霊気（れいき）」がさらに凝って雲状となった霊。万物の霊の三種類の一つで、人間や動植物の身体の元となる土の精霊。陰陽の核を有して物質化し、霊位（れいい）の高低や働きの強弱の差がある（第一章）。

エブス族（ぞく）

五種族の一つで、古代カナン地方の先住民族。出雲族（いずもぞく）の中の最も劣った者達と猿人族（えんじんぞく）の中の優れた者達が結ばれて生まれた。地上で最も栄えたが、ノアの大洪水で半数以上が

滅び去った（第一章）。

煙塊霊（えんかいれい）

万物の霊の三種類の一つで、煙のような塊の霊。神の陰陽の核を求めて漂い、核を得ても霊性が劣る為に半霊半体（はんれいはんたい）となり、現世（うつしよ）に肉体を持って出る事は出来ない。悪想念に感応して病気や災難などの霊障（れいしょう）をもたらす（第一章）。

猿人族（えんじんぞく）

五種族の一つ。雲状霊（うんじょうれい）によって生まれた猿のような獣が生死を繰り返すうちに霊性が進化し、猿と人の中間のような身体となった種族。ノアの大洪水以降、エブス族系と結ばれて世界中に広がった（第一章）。

御歌（おうた）

御神霊から神示として授かった歌。第五章「神示の御歌」に、稚日女岐美神（わかひめぎみのかみ）をはじめとする御神霊の御歌が、授かった場所や折とともに収められる。序にも国之常立大神からの御歌がある。

大雷男之神（おおいかづちのおのかみ）

第四章で別雷男之神（わきいかづちおのかみ）と並べて「荒の神」として挙げられる、世の元からの生き神様の一柱。雲の中で蓄積された静電気が放電される働きを「荒の神」と言う。

大国主神（おおくにぬしのかみ）

物質世界によって生み出された「出雲の霊」が神格化した神。素盞嗚神（すさのをのかみ）の後の地上世界の主宰神（しゅさいじん）で、物質文明を栄えさせたが、国譲（くにゆず）りで退位し、島根に神殿を建てて祀られた（第一章）。

大宜都比売神（おおげつひめのかみ）

食事や衣服、住まいなど衣食住全般の働きを言う神名。古事記（こじき）で悪神とされた荒振神（あらぶるかみ）の一柱だが、本書は、素盞嗚神（すさのをのかみ）が乱れた衣食住の生活を正された事を、この神を斬った事と説く（第一章）。

大戸地神（おおとのぢのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、幽の「動力」の神である（第一章）。

大戸辺神（おおとのべのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、顕の「静力（せいりょく）」の神である（第一章）。

大直霊（おおなおひ）

天照大御神（あまてらすおほみかみ）・素盞嗚神等の神々の直霊（なおひ）を言う。第五章の神問答で、人間の直霊は大直霊とは言わないと示される。

大直毘神（おおなおびのかみ）

第五章で、天照大御神（あまてらすおほみかみ）・素盞嗚神（すさのをのかみ）までの幽の顕の神々の直霊（なおひ）と説かれる神名。伊邪那岐神（いざなぎのかみ）・伊邪那美神（いざなみのかみ）までの直霊は神直毘神（かむなおびのかみ）と言う。

面足神（おもだるのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、幽の「合力（ごうりょく）」の神である（第一章）。

か行

惶根神（かしこねのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、顕の「分力」（ぶんりょく）の神である（第一章）。

金山彦神（かなやまひこのかみ）

製鉄や鍛冶の働きを言う神名で、金山姫神（かなやまひめのかみ）と対をなす。古事記（こじき）で悪神とされた荒振神（あらぶるかみ）の一柱だが、神々が悪いのではなく、その働きを人間が過剰に悪用した為に戒められたと説く（第一章）。

金山姫神（かなやまひめのかみ）

製鉄や鍛冶の働きを言う神名で、金山彦神（かなやまひこのかみ）と対をなす。古事記（こじき）で悪神とされた荒振神（あらぶるかみ）の一柱だが、神々が悪いのではなく、その働きを人間が過剰に悪用した為に戒められたと説く（第一章）。

神祀り（かみまつり）

神に対する正しい信仰心の現れとなる行為。無形で行う幽斎（ゆうさい）（心で神を思い敬う）と、

神像や社などの形に現して祀る顕斎の違いがある（第四章）。

神皇産霊神

大元霊の神意による旋回運動で霊が分かれた、水の霊気（陰）の御名。高皇産霊神・天之御中主神とともに造化三神と称えられ、高皇産霊神とともに神霊界に岐美の二柱として顕現された（第一章）。

神世七代

紫微天界の地の神々から岐美の神々までを言う。紫微天界の天の神々は別天津神と言う（第一章）。

神懸り

御神霊が物質化せずに、霊身による精神のみで人に現れる事。本書で伝える多くの内容は、神感法・自感法による神懸りで御神霊にお伺いしたものである（序・第一章）。

神直霊

伊邪那岐神・伊邪那美神までの神々の直霊。第五章の神問答で示される。天照大御神・素盞嗚神等の神々の直霊は大直霊と言う。

神直毘神（かむなおびのかみ）

古事記（こじき）・日本書紀（にほんしょき）にある神名。本書では、御神霊特有の直霊（なおひ）であり、伊邪那岐神（いざなぎのかみ）・伊邪那美神（いざなみのかみ）までの神々の直霊と説く（第五章）。

惟神霊幸倍坐世（かむながらたまちはえませ）

「神の御心のままに（死者の）御霊（みたま）が幸へますように」という意味の言葉。祖霊（それい）への祈念で唱え、塩湯で身を清める際にも唱えるとより効果的とする（第三章・第四章）。

岐美（きみ）

伊邪那岐神（いざなぎのかみ）と伊邪那美神（いざなみのかみ）の二柱の神の事で、紫微天界（しびてんかい）の高皇産霊神（たかみむすびのかみ）と神皇産霊神（かみむすびのかみ）が神霊界（しんれいかい）に顕現（けんげん）された神々。岐は気（キ）、美は身（ミ）を表し、見出しでは「岐美（気身）」と記して、霊（気）と体の身体の意も込める（第一章）。

金勝要神（きんかつかねのかみ）

トイレの神様として、家屋のトイレに居ると伝えられている神。本書は、家屋には神々の働きに相応した場所に必ず神が鎮まり守護していると説く（第四章）。

奇魂（くしみたま）

四魂（しこん）の一つ。感知・感性・感受性などの感応力によって真を覚る「霊的感覚の奇びなる働きの御魂」。真理や本質を見抜き理解する精神で、智に当たり、色は青みを帯びた紫色で、和魂（にぎみたま）とともに陰魂（瑞霊（ずいれい））をなす（第二章）。

国魂神（くにたまかみ）

人間は生まれる際に、産土神（うぶすながみ）とともに天津神や国魂神の霊も受ける（受霊）。第一章では「国生み、神生み」を、次の弥勒（みろく）の世の国魂神となる御神霊を生み成す事と説く（第一章・第四章）。

国之常立神（くにのとこたちのかみ）

主神が顕現（けんげん）された地の神で、地の土の素霊子（それいし）の御神名、また土の霊気（れいき）が和魂（にぎみたま）として活動する時の御名。国祖（こくそ）神として地獄を清浄にする立替えの御神業を始め、龍神の姿で鳴門（なると）の潮流を降りた（第一章）。序・第五章では国之常立大神と称える。

国之水分神（くにのみくまりのかみ）

第四章で天之水分神（あめのみくまりのかみ）と並べて「雨の神」として挙げられる神。国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）

として世の元から活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

国譲り（くにゆずり）

第一章で、大神様が人々の御霊（みたま）を立直す為に、地上世界の主宰神（しゅさいじん）であった大国主神（おおくにぬしのかみ）を退位させ、主宰神を正当な天津日嗣（あまつひつぎ）に定めた事。豊葦原中国（とよあしはらのなかつくに）を治める為に瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）を天孫降臨（てんそんこうりん）させ、万有の霊気（れいき）を正した。

熊野久須毘神（くまのくすびのかみ）

一霊四魂（いちれいしこん）の働きの名称である五男神（ごなんしん）の一柱で、奇魂（くしみたま）（智）の働きの神名である（第一章・第二章）。

古事記（こじき）

神典。大宇宙の開闢（かいびゃく）から神々の誕生、星々や国の生成、人間や生命の成り立ちが説かれていると本書は言い、その記述を予言や設神理として読み解く。天之神（あまのかみ）は古事記に登場する以前の神々である（第一章）。

別天津神（ことあまつかみ）

紫微天界（しびてんかい）の天の神々の事。紫微天界の地の神々から岐美（きみ）の神々までは神世七代（かみよななよ）と言う

（第一章）。

言霊（ことたま）

第五章の御歌（おうた）に詠まれる語。「悲しくも　真の言霊　響かぬは　我の言葉（心）が　真に遮り」と、我の心が真を遮ると、真の言霊は響かないと詠まれる。

木ノ花咲耶姫（このはなさくやひめ）

第五章で、石長比売神（いわながひめのかみ）と対の神とされる瑞（みず）の神。二柱は厳（いづ）と瑞、幽と顕の関係で、二神で一神であり、御一体となって伊都能売神、日之出の神、つまり弥勒（みろく）の神となると説く。

木花知流比売神（このはなちるひめのかみ）

古事記（こじき）にある神。第五章では石長比売神（いわながひめのかみ）の事であると説き、「咲く」の対の「散る」という両面を併せ持つとする。

さ行

幸魂（さちみたま）

四魂（しこん）の一つ。慈しみの精神で、愛に当たり、色は緑色で、日に当たり、荒魂（あらみたま）とともに陽魂（厳霊）をなす。土の霊気（れいき）が幸魂として活動する御名を天之常立神（あめのとこたちのかみ）と言う（第一章・第二章）。

三宝荒神（さんぽうこうじん）

第四章で、火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）とともに家屋内の台所に居ると伝えられている神として挙げられる。

四魂（しこん）

直霊（なおひ）である御霊（みたま）の働きを四種に分けたもので、荒魂（あらみたま）・幸魂（さちみたま）・和魂（にぎみたま）・奇魂（くしみたま）の事。主神の生成化育（せいせいかいく）の大精神の意志を実現する為の働きであり、直霊と合わせて一霊四魂（いちれいしこん）と言う（第一章・第二章）。

科戸彦神（しなどひこのかみ）

第四章で科戸姫神（しなどひめのかみ）と並べて「風の神」として挙げられる神。国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）とし

て世の元から活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

科戸姫神（しなどひめのかみ）

第四章で科戸彦神（しなどひこのかみ）と並べて「風の神」として挙げられる神。国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）として世の元から活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

紫微天界（しびてんかい）

天の世（あまよ）の原初の神々から天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）のおわします世界で、五大世界の一つ、大宇宙の天極。現世（うつしよ）では富士に相応する。その帷（岩戸（いわと））が開かれると、万物の内に鎮まる真の本霊（ほんれい）が光輝く（第一章）。

紫微天球（しびてんきゅう）

大宇宙の中心となる大根元の世界。その天地は物質世界のような上下の天地ではなく、重力や方向もない御神霊の玉のみの世界で、天と地それぞれにまた陰陽がある（第一章）。

神皇記（しんのうき）

富士宮下文献（ふじみやしたぶんけん）の一つ。大元霊（だいげんれい）の神の御名を天之峯火夫神（あまのみねひをのかみ）と称え、天之神七代の神々につ

いては御神名のみを記す（第一章）。

地主神（じぬしがみ）

その土地と土地内の敷地や家屋を守護する神。鎮守神（ちんじゅがみ）より守護の範囲は狭く、霊位（れいい）は下である。家屋を壊す前には、産土神（うぶすながみ）・鎮守神とともに報告と感謝を申し上げる（第四章）。

自霊（じれい）

正守護神（せいしゅごしん）の別名で、霊的自分の精霊。水・梅に当たり、御名は多岐都比売神（たぎつひめのかみ）で、今現在の自らの意識はこの自霊の意識である。自我や我欲により曇ると、曲霊（まがつひ）へと変貌する（第一章・第二章）。

素盞嗚神（すさのをのかみ）

第五章では、天照大御神（あまてらすおほみかみ）の岩戸隠れの原因とされる暴挙はしておらず、「現ふる神様」と慕われるこの神を良く思わない者の計り事で落とし入れられたと説く。気吹戸主神（いぶきどぬしのかみ）・速佐須良比売神（はやさすらひめのかみ）はこの神の御分霊（ごぶんれい）で、その直霊（なおひ）は大直霊（おおなおひ）と言う。

須比遅根神（すひぢねのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、顕の「凝力」（ぎょうりょく）の神である（第一章）。

正守護神（せいしゅごしん）

自霊（じれい）が中有界（ちゅううかい）あるいは天界に属している時の呼び名で、御名は多岐都比売神（たぎつひめのかみ）。死亡時にはお迎えに現れ、その人を中有界に導く（第一章・第三章）。

精霊体（せいれいたい）

霊体の事を厳密には精霊体と言い、同じものである。雲状霊玉（うんじょうれいぎょく）の象方面での現れで、本霊（ほんれい）・自霊（じれい）・体霊（たいれい）の三種類がある。人間の成長と共に成長し、人間の容姿に大変類似する（第一章・第二章）。

瀬織津姫神（せおりつひめのかみ）・瀬織津比売神（せおりつひめのかみ）

祓戸四柱神（はらえどよはしらのかみ）の一柱で、紫微天界（しびてんかい）と神霊界（しんれいかい）の間の岩戸（いわと）を守護する。天照大御神（あまてらすおほみかみ）の御分霊（ごぶんれい）で御同神（ごどうしん）。「織」は当て字で真は「下」、紫微天界の上の瀬から下りる意であり、瀬下津姫神が正しいと説く（第一章）。

た行

体霊（たいれい）

副守護神（ふくしゅごしん）の別名で、霊体の三種類の一つ。土・竹に当たり、御名は市杵島比売神（いちきしまひめのかみ）。食欲・睡眠欲・性欲などの生理的欲求は、体霊が身体を健全に保つ為の守護の働きである（第一章）。

高天原（たかあまはら）

天界の神々の住まう所。神霊界（しんれいかい）（神界（しんかい）・天界）を神道ではこう呼ぶ。本書は、地上に理想の神国を築き、地上の高天原（地上天国（ちじょうてんごく））を実現する役割を人に説く（第三章）。

富士（たかちほ）

第五章の御歌（おうた）で、「富士」に「たかちほ」とルビを振った箇所の読み。「ふじ」と読む山の富士山とは区別し、霊的な意味の富士、霊界の崇高な場所を表す。同章に一度出る地名の「高千穂（たかちほ）」とは別。

高皇産霊神（たかみむすびのかみ）

大元霊（だいげんれい）の神意（こころ）による旋回運動（せんかいうんどう）で霊が分かれた、火の霊気（れいき）（陽）の御名。神皇産霊神（かみむすびのかみ）・

天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）とともに造化三神（ぞうかさんしん）と称えられ、神皇産霊神とともに神霊界（しんれいかい）に岐美（きみ）の二柱として顕現（けんげん）された（第一章）。

多岐都比売神（たぎつひめのかみ）

自霊（じれい）（正守護神（せいしゅごしん））の御名で、水・梅に当たる。自霊は霊的自分の精霊であり、中有界（ちゅううかい）あるいは天界に属しているものを正守護神と言う（第一章）。

多紀理毘売神（たぎりひめのかみ）

本霊（ほんれい）（本守護神（ほんしゅごしん））の御名で、火・松に当たる（第一章）。第五章には、この神が神界（しんかい）にご昇神される際の印旛沼での御歌（おうた）がある。

建御雷神（たけみかづちのかみ）

第四章で経津主神（ふつぬしのかみ）と並べて「地震の神」として挙げられる神。国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）として世の元から活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

玉留魂（たまつめむすび）

土の精霊の名。鉱物（土）の本質となる「剛体」の象と現れ、身体では「骨」に相応する。その神は常立神（とこたちのかみ）である（第一章）。

玉依姫（たまよりひめ）

第五章の稚日女岐美神（わかひめぎみのかみ）の返し歌「清らなり　玉依姫の　安堵（あんど）する　涙は富士の　ススキの波に」に詠まれる名。

大元霊（だいげんれい）

大宇宙の万有の中心の核となる大根元の霊で、元より陰陽（火水（かみ））の両方を併せ持つ。『神皇記（しんのうき）』では天之峯火夫神（あまのみねひをのかみ）と称える。これが凝った霊を「土の霊気（れいき）」と言う（第一章）。

中有界（ちゅううかい）

人間の死後に最初に行く、地上世界（現世（うつしよ））と霊界との中間的な世界。神道では「天の八衢（やちまた）」、キリスト教では「精霊界」、仏教では「六道（ろくどう）の辻」と言う（第三章）。天界に入る準備が整うと、ここで産土神（うぶすながみ）に会う。

鎮守神（ちんじゅがみ）

土地や敷地、家屋を守護する神。守護の範囲は地主神（じぬしがみ）と同様だが、地主神より広く、霊位（れいい）は上である（第四章）。

角杙神（つぬぐいのかみ）

主神の御神力である八力（八柱四対の神）の一柱で、幽の「弛力」（しりょく）の神である（第一章）。

常立神（とこたちのかみ）

土の精霊（玉留魂（たまつめむすび））の神で、天と地にわたる。天の土の素霊子（それいし）が天之常立神（あめのとこたちのかみ）、地の土の素霊子が国之常立神（くにのとこたちのかみ）であり、火水（かみ）の両方の霊気（れいき）を持つ為、時に応じて厳（いづ）あるいは瑞（みず）の御神霊として働く（第一章）。

豊葦原中国（とよあしはらのなかつくに）

第一章の国譲（くにゆず）りの話で、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が治める為に天孫降臨（てんそんこうりん）した国。これによって日本の民は天孫民族（てんそんみんぞく）となり、霊性が立ち直って大和民族（やまとみんぞく）となったと説く。

豊雲野神（とよくもぬのかみ）

水の霊気（れいき）（陰）の御名で、全宇宙の真空帯（しんくうたい）に漂う透明な水の極微粒子（霊水子）の神。水の精霊（足魂（たるむすび））として植物の本質となる柔体の象と現れ、奇魂（くしみたま）として活動する（第一章）。第五章にこの神の御歌（おうた）がある。

豊雲野（とよくもの）

豊雲野神（とよくもぬのかみ）の名が第五章の御歌（おうた）に詠まれた形。「一厘（いちりん）の　仕組（しく）み伝えし　豊雲野」と、一厘（いちりん）の仕組（しく）みを伝えた神として詠まれる。

鳥之石楠船神（とりのいわくすふねのかみ）

天鳥船（あめのとりふね）とも言い、現在の飛行機や飛行船、宇宙船などの乗り物の働きを言う神名。古事記（こじき）で悪神とされた荒振神（あらぶるかみ）の一柱だが、神が悪いのではなく、人間がその働きを過剰に悪用した為に戒められたと説く（第一章）。

な行

直霊（なおひ）

主神による生成化育（せいせいかいく）の大精神の意志を受け継いでいる御霊（みたま）で、その意志を実現する為の働きが四魂（しこん）である。精神が大精神から外れそうな時には打ち消し、外れた時には自らを省みて正しい精神に戻す働きを備える（第二章）。

鳴門（なると）

激しい潮流の渦の地で、地国・地極の世界は現世（うつしよ）では鳴門の渦の底に相応する。国祖神（こくそしん）や瑞（みず）の女神（三女神（さんじょしん））はその渦を深く降りて行った。「富士を開いて鳴門に収める」のが「富士と鳴門の仕組（しく）み」である（第一章）。

和魂（にぎみたま）

四魂（しこん）の一つ。他に触れ合い接する精神で、親に当たり、色は橙色を帯びた黄色で、地に当たり、奇魂（くしみたま）とともに陰魂（瑞霊（ずいれい））をなす。土の霊気（れいき）が和魂として活動する御名を国之常立神（くにのとこたちのかみ）と言う（第一章・第二章）。

瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）・邇邇芸命（ににぎのみこと）

国譲（くにゆず）りの後、豊葦原中国（とよあしはらのなかつくに）を治める為に天孫降臨（てんそんこうりん）させられた神（第一章）。第五章では、結婚の際に石長比売神（いわながひめのかみ）を返した為に天孫の寿命が短くなったという伝えを、体のみで霊的に不完全なまま継承されてきた為と説く。

日本書紀（にほんしょき）

古事記（こじき）とともに挙げられる書。本書は、神霊界（しんれいかい）の神々は古事記や日本書紀などで神格化

されて人々に伝えられてきたとし、そこにある神直毘神（かむなおびのかみ）の名を解説する（第一章・第五章）。

は行

速秋津比売神（はやあきつひめのかみ）・速開都比売神（はやあきつひめのかみ）

祓戸四柱神（はらえどよはしらのかみ）の一柱で、神霊界（しんれいかい）と地上界の間の岩戸（いわと）を守護し、神霊界と現世（うつしよ）の間の堰におられる。天照大御神（あまてらすおほみかみ）の御分霊（ごぶんれい）。「秋」は当て字で真は「開」、素早く神垣（岩戸）を開けて神気を流す意と説く（第一章）。

速佐須良比売神（はやさすらひめのかみ）

祓戸四柱神（はらえどよはしらのかみ）の一柱で、地国界（ちこくかい）と地極界（ちきょくかい）の間の岩戸（いわと）を守護し、根の国底の国（根底国（ねそこのくに））と底根底国（そこのねそこのくに）（地極界）の間の堰におられる。素盞嗚神（すさのをのかみ）の御分霊（ごぶんれい）である（第一章）。

霊止（ひと）

人の事。人の体には、身体の形状と異なる様々な姿形の「霊が身体に止まる」が故に「霊止」と言う。地上で初めて人体の姿で現れた天人を真奈霊止族（まなひとぞく）と言う（第一章）。

火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）

火力を活用し発展した産業の働きを言う火之夜藝速男神（ひのやぎはやをのかみ）の別名。第一章では、この神を生んだ事を過剰な火の産業を悪用する文明の発達、首を落とした事を悪分子への制裁と読み解く。

火之夜藝速男神（ひのやぎはやをのかみ）

火力を活用し発展した産業の働きを言う神名で、火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）とも言う。古事記（こじき）で悪神とされた荒振神（あらぶるかみ）の一柱だが、人間がその働きを過剰に悪用したのだと説く（第一章）。

一二三（ひふみ）

主神の「霊力体（ひりょくたい）」の事で、大宇宙の万物を創造し発展して行く根元である。八力の御神力の説明に続いて示される（第一章）。

副守護神（ふくしゅごしん）

体霊（たいれい）の別名。現世（うつしよ）の物質的な身体に備わる特殊な精霊で、身体に寄り添い、自己保存の働きなどにより肉体に関するあらゆる守護を行う。その御名を市杵島比売神（いちきしまひめのかみ）と称える（第一章）。

副霊（ふくれい）

自分以外の霊で、後天的に融合する精霊。中には悪さをしたり影響を及ぼす霊もあり、本書はこれを「悪霊」とも言い、自霊（じれい）と体霊（たいれい）を侵して自我や執着心・物欲を強める。八岐大蛇（やまたのおろち）とはこの副霊の事と説く（第一章）。

経津主神（ふつぬしのかみ）

第四章で建御雷神（たけみかづちのかみ）と並べて「地震の神」として挙げられる神。国之常立大神の御分霊（ごぶんれい）として世の元から活動する「世の元からの生き神様」の一柱である。

本守護神（ほんしゅごしん）

本霊（ほんれい）の別名。神霊界（しんれいかい）で生まれ神界（しんかい）に存在する雲状霊玉（うんじょうれいぎょく）の本体の象であり、神的自分の精霊である。その御名を多紀理毘売神（たぎりひめのかみ）と称え、神様から伝えられる事は、本守護神を通して人間が感じ取る（第一章）。

本田親徳翁（ほんだちかあつおう）

「四魂（しこん）」の働きを伝え、神の種別を「幽の幽」「幽の顕」「顕の幽」「顕の顕」に分けた人物（本田霊学）。第四章では著書『道之大原』から、幽斎（ゆうさい）と顕斎（けんさい）についての一節が引か

れる。

本霊（ほんれい）

本守護神（ほんしゅごしん）とも言い、霊体の三種類の一つ。火・松に当たり、御名は多紀理毘売神（たぎりひめのかみ）。現世（うつしよ）では様々な要因で真の本霊は休止しているが、岩戸（いわと）が開かれると光輝き、目覚め始めると説く（第一章）。

ま行

曲霊（まがつひ）

自我や自己愛による自分本位の精神が強くなり、罪や過失を犯しても悪いと思わない傲慢な精神へと変貌した御霊（みたま）。御霊本来の正しい活動に逆らっている「自分そのもの（我）」であり、当人は気付（きづ）かない（第二章）。

真名井（まない）

天の神気の集まる清浄な所で、その泉を真奈泉とも言い、現世（うつしよ）では琵琶湖となる。古事記（こじき）で天照大御神（あまてらすおほみかみ）と素盞嗚神（すさのをのかみ）の誓約（うけひ）により三女神（さんじょしん）と五男神（ごなんしん）が生まれた所。第一章では、五男三女神が去って消滅したと説く。

真奈霊止族（まなひとぞく）

五種族の一つ。天の真名井（まない）の誓約（うけひ）で生まれた五男三女神の霊が鎮まり、地上で初めて人体の姿で現れた天人で、真の霊止（ひと）（神人（かみひと））と言う。出雲族（いずもぞく）の優れた者達と結ばれて大和族（やまとぞく）が生まれた（第一章）。

瑞（みず）

厳（いづ）と対をなす語で、「三ツ」とも読ませる。三女神（さんじょしん）を瑞の女神、陰魂（和魂（にぎみたま）・奇魂（くしみたま））を瑞霊（ずいれい）と言い、木ノ花咲耶姫（このはなさくやひめ）は瑞の神とされる。第一章では地の祖神を「瑞の大神」と称える。

ムの神（かみ）

天之神七代の神々の別称で、「⊙の⊙」とも称える。第一章では、主神が紫微天界（しびてんかい）の中心に七重（ななえ）の帷（岩戸（いわと））を下ろし、天（あま）の世（よ）のムの神々と共に御隠れになったと説く。

ムの世界（せかい）

天之神七代の世界の別称で、原初の形として存在しない世界。その神々をムの神（かみ）と言う（第一章）。

無幽霊（むゆうれい）

万物の霊の三種類の一つ。姿形も色や臭いも無く、秩序を持たない「根元の破壊と破滅」の働きをする悪霊。秩序の乱れや人間の負の感情に吸い寄せられて病気や事故などの災難を起こすが、信仰で輝く御霊（みたま）には近付けない（第一章）。

元津四柱大神（もとつよはしらのおほかみ）

主神の四魂（しこん）の働きとして活動される神々。人間や万有全ての御霊（みたま）の働きもその分け御霊としての活動であるが、人間の霊魂は五男神（ごなんしん）の御名となる（第二章）。

や行

大和族（やまとぞく）

真奈霊止族（まなひとぞく）と出雲族（いずもぞく）の中の優れた者達が結ばれて生まれた種族で、天孫民族（てんそんみんぞく）とも言い、日本の民族となる。第四回目の大地変（だいちへん）の後、地上で最も強い地位の種族となった（第一章）。

ら行

龍宮乙姫神（りゅうぐうおとひめのかみ）・龍宮（りゅうぐう）の乙姫（おとひめ）

第五章の神問答で、稚日女岐美神（わかひめぎみのかみ）とともに著者の問いに答える御神霊。第三章・第四章でも、祖霊（それい）への祈念や方位・風水について、龍宮の乙姫からお伺いした言葉が引かれる。

わ行

稚日女岐美神（わかひめぎみのかみ）・稚日女尊（わかひるめのみこと）

第五章の神問答などで、龍宮乙姫神（りゅうぐうおとひめのかみ）とともに著者の問いに答える御神霊。第五章「神示の御歌（おうた）」は、この神をはじめとする御神霊から授かった御歌である。稚日女尊とも記す。

別雷男之神（わきいかづちおのかみ）

第四章で大雷男之神（おおいかづちのおのかみ）と並べて「荒の神」として挙げられる、世の元からの生き神様の一柱。雲の中で蓄積された静電気が放電される働きを「荒の神」と言う。

『理の書』の図と用語集

二〇二六年十月十八日　発行

著　者　奄暘

編　集　三葉

発行者　佐野　裕

発行所　トランスワールドジャパン株式会社
〒一五〇－〇〇〇一
東京都渋谷区神宮前六－二五－八
神宮前コーポラス
ＴＥＬ　〇三－五七七八－八五九九
ＦＡＸ　〇三－五七七八－八七四三
メール　info@transworldjapan.co.jp

非売品

本書の無断転載・複製を禁じます。